韓国京畿道外国語教育研修院現職日本語教師研修における上級会話教材開発と 2007 年度授業実践の連携

小野寺　志津　　木戸　光子

要　旨

2007 年度韓国京畿道外国語教育研修院で実施された中高日本語教員の現職者研修について、上級会話教材開発の改定の製作意図と改良点、およびこの教材を用いた上級レベルの会話クラスでの授業実践の結果について報告する。まず、教材改定の意図および効率的な授業に向けての改善点について説明する。次に、2 つの上級会話クラスでこの教材を用いて授業を行った結果を報告する。最後に、教材開発と授業実践の連携について今後の課題を述べる。
【キーワード】会話教材　トーク　ディベート　討論　教師研修

Linking Teaching Material Development and Teaching in an Advanced Conversation Class for Korean Junior High and High School Teachers on a Japanese In-service Training Course

ONODERA Shizu, KIDO Mitsuko

【Abstract】This is a report on revising a teaching material for developing oral communication skills for Korean teachers of Japanese, and the effects of using the material in advanced conversation class for the junior high and high school teachers in-service course at the Gyeonggi-do Institute for Foreign Language Education in 2007. In this paper, we will first review the purpose of development of the conversation material and the improvement of teaching efficiency. Secondly, we will report on teaching conversation in two classes using the material, and finally discuss some issues for future consideration for linking teaching materials development and teaching in class.
【Keywords】conversation materials, talk, debate, discussion, teachers in-service course

1.　はじめに

平成17年度から筑波大学留学生センターで行っている韓国人現職日本語教師のための研修が3度目を迎えるにあたり、平成18年度に作成した新規上級会話教材[1]の改訂を行った。これを、上級会話教材改訂版と呼ぶ。研修の対象は、韓国・京畿道の中学、高校で日本語を教えている韓国人教師44名で、うち上級会話を選択した21名をクラスごとに2グループに分け研修を行った。なお、本稿は、前半の1、2、3節の上級会話教材改訂版のねらいと作成過程については小野寺が、後半の4、5、6節の授業の実践報告については木戸が分担して執筆した。

2.　上級会話教材改訂版のねらいと概要

2.1　教材改訂のねらい

平成18年度に開発した新規上級会話教材の最大の目的は、普段日本語で会話をする機会がない研修生に「いかに話をさせるか」だった。そのため、テーマを高校の教師として考えるべきこと、韓国・日本社会に関することにしぼった。さらに、「話すだけ」に終始せず、そこで話した内容を研修生が教壇に持ち帰って自らの授業に生かせるよう、最終課題として日本文化や日本での体験をテーマにした発表会を課した。昨年度の教材は、全部で9課からなり連続している。概要は次の通りである（表1）。

表1　平成18年度上級会話教材の概要

課	タイトル	目標	主な活動形態	言語要素
1	はじめまして（自己紹介）	日本人の印象に残る、効果的な自己紹介を考える。日本人との会話に適切／不適切な話題を考える。 相手から引き出した情報を整理して話す。	・インタビュー ・発表	・インタビューの表現 ・あいづち ・性格を現す言葉
2	喫煙は犯罪だ（ディベート1）	ディベートに慣れる。理由や資料を基に論理的に意見を述べる。メモを取る。相手の意見を聞きながら自分の意見をまとめる。	・簡単なテーマでのディベート（2回） ・教師からのフィードバック	・意見を述べる ・賛成する ・反対する ・理由を述べる・引用する ・相手の意見を確認する
3	最近の出来事（3分スピーチ）	聞き手を意識した、わかりやすいスピーチをする。スピーチ特有の表現を学ぶ。日本人が好むスピーチの仕方を知る。良い聞き手の態度を知る。	・スピーチ ・質疑応答	・感情を表す言葉 ・スピーチの構成（切り出し、出来事、まとめ、引用

4	学歴社会は無意味だ！？（ディベート２）	より深いテーマで本格的なディベートを行う。事実、引用、意見を分けて述べる。	・ディベート ・審判	・出典を明らかにする。 ・意見を強調する。
5	韓国社会を考える（討論）	資料を基に論理的に意見を述べる。他の人の意見を聞きながらメモを取る。意見をまとめて発表する。	・討論 ・共同声明を書く、発表する ・質疑応答	相手の意見を肯定した上で、自分の意見を主張する。
6	韓国の中高生に伝えたい日本　①（日本語で発表）準備	（６～８回を通して）日本語で発表ができる。日本に関しての知識を増やす。 （６回目）自分の体験を他者に伝える。共有する。	・グループ討論	・伝聞の日本語 ・わからないことを聞く、頼む
7	同　②準備	わかりやすく伝えることができる。効果的な発表について考える。	・ペアワーク ・発表原稿を直す・パワーポイントで資料作成 ・発音チェック。	・同意する ・説明を求める ・発表の表現 ・司会の表現
8	同　③発表会	資料を用いながら、効果的な発表ができる。的確な質疑応答ができる。	・発表 ・質疑応答 ・司会進行	
9	同　④発表会	同上	同上	

この教材を用い、作成者である筆者が平成 18 年度の研修を行ったところ、次のような反省点と改善点が明らかになった[1]。

1．分量の適切さ：授業内で扱いきれない、また予習として消化しきれない量の文型等の提示は、達成感が得にくくなるため避けた方がよい。研修生は会話だけではなく、他の科目も同時に履修していることを考慮する。

2．教師用マニュアルの作成：教材の効果的な使用のため、活動目的と韓国人日本語話者の特徴を併記したマニュアルが必要である。

3．討論、ディベートのテーマ選択：チーム分けに際しては、韓国の年齢を尊重するという文化を考慮しなければならない。また、それを踏まえた討論、ディベートテーマの選択が必要になる。

4．発表会：授業の最後に設けていたが、予想外に規模の大きな発表会になった。本来の目的は発表会を行うまでの発音練習であったり、お互いの発表に対するコメントであったが、全員の前で発表することに目的が変わってしまい、結果として本来の目的を十分に達成できなかった。これは研修生の持っている「発表会」というイメージと、教材における「発表会」の扱いに違いがあったためではないかと考えられる。

5．発音：終了後のアンケートに、発音練習を望む声が多かった。

以上を踏まえて改訂を行った。最大の目的は研修生に「いかに話をさせるか」と変わらない。まず、今後教材が開発者の手を離れるため各活動のねらいを記した教師用マニュアルを作成した。次に、研修の形式変更に伴った会話コマ数削減に対応するため各課を独立させた。これにより、上級会話の担当教員が使用する課を選択できるようになる。さらにコース全体のバランスを鑑み、会話では宿題は課さず、予習は最低限に抑え、発音練習を教材内に組み込むこととした。具体的な改訂点は次の通りである。

1）９課それぞれを独立させ、会話を担当する教師が自由に課を選択できるモジュラー形式にする。
2）発音練習を増やし、教材内に組み込む。
3）発表会とその準備にあてていた４コマを削除。
4）討論、ディベートのテーマを再考。教育問題など研修生にとって身近なものや、年齢を問わず自由に意見が述べられるものとする。
5）フリートークを増やし、研修生が日本語での会話そのものを楽しめるように配慮。
6）研修生にとって身近な教育の話題を盛り込む。
7）授業のまとめの活動として、「討論」のみ「共同声明文」を書く作業を行う。

以上を念頭に、会話教材の改訂を行った。

2.2　概要

改訂した教材の概要は、次の通りである（表２）。改訂を行った部分は太字で記した。

表２　上級会話教材改訂版の概要

課	タイトル	目標	主な活動形態	言語要素
1	はじめまして（自己紹介）	日本人の印象に残る効果的な自己紹介を考える。日本人との会話に適切／不適切な話題を考える。 相手から引き出した情報を整理して話す	・インタビュー ・発表	・インタビューの表現 ・あいづち ・性格を表す言葉
2	最近の出来事（３分スピーチ）	聞き手を意識した、分かりやすいスピーチをする。スピーチ特有の表現を学ぶ。日本人が好むスピーチの仕方を知る。良い聞き手の態度を知る。	・スピーチ ・質疑応答	・感情を表す言葉 ・スピーチの構成（切り出し、出来事、まとめ、引用）
3	**くじ引きトーク**	**テーマについて、短い時間で考えをまとめ、要領よく話す。質問を考えながら相手の話を聞く。質疑応答で話の内容を豊かにする。**	**・ペア／グループ活動 ・質疑応答 ・あいづち**	**・短いスピーチ**

4	夏より冬の方がいい（ディベート１）	ディベートに慣れる。理由や資料を基に論理的に意見を述べる。メモを取る。相手の意見を聞きながら、自分の意見をまとめる。	・簡単なテーマによるディベート（２回） ・教師からのフィードバック	・意見を述べる ・賛成／反対する ・理由を述べる ・引用する ・相手の意見を確認する
5	喫煙は犯罪だ（ディベート２）	より深いテーマで本格的なディベートを行う。事実、引用、意見を分けて述べる。	・ディベート ・審判をする	・出典を明らかにする ・意見を強調する
6	韓国社会を考える（討論１）	資料を基に論理的に意見を述べる。他の人の意見を聞きながらメモを取る。意見をまとめて発表する。	・討論 ・共同声明文を書く、発表する ・質疑応答	・相手の意見を肯定した上で、自分の意見を主張する
7	私の日本体験（フリートーク１）	会話を楽しむ。他の人の体験を聞き、知識を増やす。聞いたことを他の人に伝える。	・ペア／グループ活動 ・質疑応答 ・あいづち	・事実を確認する
8	記憶に残る教え子（フリートーク２）	会話を楽しむ。他の人の話を聞き、意見を述べる。聞いたことを他の人に伝える。	・ペア／グループ活動 ・質疑応答 ・あいづち	・事実を確認する ・聞いたことを話す
9	教育問題を考える（討論２）	より深いテーマで討論を行う。客観的な根拠に基づいて意見を述べる。自分の意見を効果的に伝える。	・討論・共同声明文を書く、発表する・質疑応答	・客観的な根拠を元に、自分の意見を効果的に主張する

教材内に、トークと名付けたものが複数存在するが、教材全体として話す活動は次のように位置づけられている。（図 1）

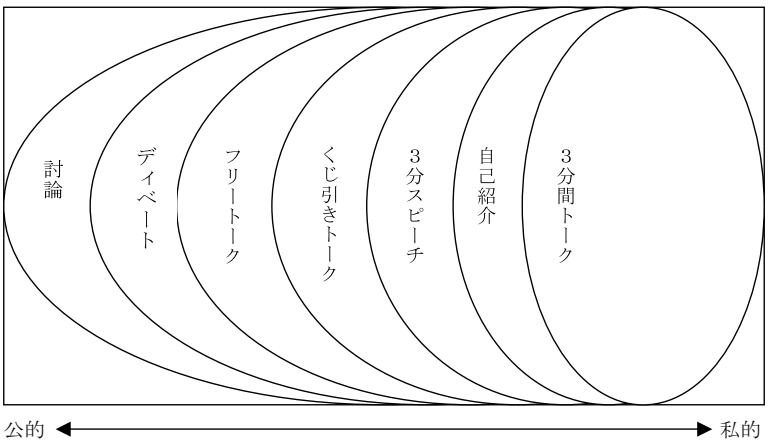

図１　教材内におけるトークの位置づけ

自分の身の回りに起こった出来事を口慣らしとして話す3分トークは、表の右端、つまり私的な話題を扱う活動だが、左に向かうにつれ話す内容は教師や社会人としての立場から発言する活動となっている。

2.3　改訂版各課のねらい

各課の改訂のねらいは次の通りである。1課、2課、6課については、研修生から積極的な反応が得られたため改訂は行わなかった。

(1) 3課：くじ引きトーク

時間をかけて話を準備することももちろん大切だが、我々が普段交わしている会話はそればかりではない。瞬時に判断して受け答えをすることもある。準備せずに日本語で会話してみようというのがこの課のねらいである。会話を楽しむことが目的だが、会話を盛り上げたり続けたりするためには、話し手と聞き手が協力し合わなければならない。話す際は短い時間で考え、書かずに、要領よくまとめて話すこと、聞く際には質問を考えながら聞いたりあいづちをうったりすることが必要である。導入時にはこのような注意が必要だろう。また、ディベートでも、相手の意見を聞いてすぐに自分の意見を述べなくてはならず、瞬時に対応する準備としても有効な活動ではないかと考える。教材にはテーマ例として、全員が話すことができそうな話題として「幸せを感じる時」「一番嬉しかったプレゼント」「初めてのデート」「ストレスを感じる時と解消法」を挙げたが、教師が準備するだけではなく研修生からテーマを募ればさらに会話に参加しやすくなる。余裕があれば録画、ないし録音してフィードバックするとより効果的だろう。ただし、緊張を高めて話しにくくなるケースもあるかもしれないので、そこは担当教師の判断となる。

(2) 4課、5課：ディベート1、ディベート2

韓国では年齢が大きな意味を持つので、組分けの際は年齢を考慮し細心の注意を払わなければならない。たとえ日本語の練習であっても、年長者の意見に逆らうことは彼らにとって心理的負担が大きく、本当の意見を言えなくなることもしばしばある。ディベートをしても最年長者が意見を言えばそれが正解となってしまいがちで、たとえば「嫁は姑の意見を尊重すべきだ」などはそもそもテーマにならない。韓国社会においては、年長者は常に敬われるべきものであり、教室活動であっても年長者である姑に意見しその面子をつぶすような行為はタブーなのだ。したがって今回の改訂では、テーマに彼らにとって身近な職場の話題を取り入れ、かつあまり年齢を問わないようなものを挙げ、研修生に選ばせる形式とした。各課で扱ったテーマは次の通りだが、もちろんテーマを研修生が考えるのもひとつの方法だ。

4課のテーマ：夏より冬の方がいい、海より山の方がいい、高校生のアルバイトは禁止すべ

きだ、高校生も携帯電話を持つべきだ、漢字の勉強は無駄だ、お金より時間の方が大切だ
5 課のテーマ：喫煙は犯罪だ、親戚づきあいは無駄だ、電車やバスの優先席は不要だ、人は内面より外見が大切だ、夫／妻より子供が大切だ、お金よりも愛は尊い、一般市民も銃を持つべきだ、ユーロのような統一通貨がアジアにも必要だ

また、くじ引きトーク同様、録画、録音によるフィードバックがあればより効果的だが、全員の前で行うことが教室内の年長者の面子をつぶすことにもなりかねないため、担当教員はこれを考慮した上で判断すべきだろう。

(3) 7 課、8 課：フリートーク 1、フリートーク 2

研修生は同じ職業に就き、同じく日本語科目を担当している。自身の授業の向上に熱心で、どうすれば学生の日本語学習意欲が向上するかという同じ悩みを抱えている。一方、研修生の日本に関する知識にはばらつきがあり、本から得られる知識には限界がある。だが、お互いの日本にまつわる経験を共有し知識を増やせば、少しでも学生に還元できるものが増えるのではないだろうか。そこで､「私の日本体験」と「記憶に残る教え子」をテーマにし、意見を交わすことをフリートークの目的とした。「記憶に残る教え子」は改訂前の教科書では 3 分間トークのテーマだったが、予想外に話が弾み、全員が興味を持っているテーマであることが分かったためフリートークで扱うことにした。担当科目である「日本」と「教え子」をテーマにすることで、どちらかだけが興味のあることを一方的に話すという事態が避けられる。また、1）話す時間を 1 人 3 分程度とし、2）全員の話を聞き終わったら印象的なものを選び､3)その話を聞いていない人に話すという活動を課すことで、フリートークとはいえ、ただ話すだけ終わらないようにした。

(4) 9 課：討論 2

討論 2 のテーマは「教育問題を考える」とした。研修生にとって、教育は最も身近な興味深いテーマである。教育に関して全員で話し合い、新しい見解を得ることは、ともすれば日本語力の向上以上に意義深いものかもしれない。ここでは、それぞれが職場で抱えている問題を出し合い、日本語で話し合い、解決策を考えていくことを目的とした。活動のまとめとして 6 課の討論 1 と同様、声明文を課した。声明文の作成により、話し合いの意義を明確にするとともに、日本語の話し言葉と書き言葉の違い、パブリックスピーキングの練習も同時に行うことができる。

(5) 3 分間トーク：

3 分間トークというのは、授業の冒頭で行うウォーミングアップ活動を意味しており、毎回授業の冒頭 5 分程度を使って行う。はじめのうちは 3 分、徐々に伸ばして 5 分程度と

しているが、テーマによっては大いに盛り上がるだろう。さらに、昨年度の研修終了後に、発音練習を増やしてほしいという要望が多かったため、今回は3分間トークとして発音練習になるものを2回分用意した。以下、3分間トークと種類とテーマを挙げる。

表３　３分間トークの種類とテーマ

回	種類	テーマ
1	３分間トーク	研修院の生活について
2	３分間トーク	最近とても嬉しかったこと
3	発音練習	「かっぱ」（谷川俊太郎）の朗読
4	４分間トーク	私が一番嫌いなもの
5	４分間トーク	最近とても驚いたこと
6	４分間トーク	大切なものを相手に説明しましょう
7	発音練習	「外郎売り」歌舞伎の科白を真似る
8	５分間トーク	私の得意なこと
9	５分間トーク	学生時代の私

発音練習のテーマのひとつには、韓国人日本語学習者が苦手な促音を多く含む「かっぱ」を選んだ。日本語の「か」にあたる音が韓国には「가」「까」「카」と3種類あり、日本語の「か行」の発音は想像以上に難しい。リズムにのって発音することで、これらを楽しく克服することができるのではないかと考えた。次に日本の伝統文化として広く知られている歌舞伎から「外郎売り」を選んだ。これは、アナウンサーや役者の間で滑舌をよくするために用いられている。以上を使うことで苦手部分の克服だけでなく、日本語独特のリズムに親しむことも可能ではないかと考えた。

3.　今後の教材改訂に向けて

以上、平成19年度の研修に向けて行った上級会話教材の改訂について報告した。今後、研修生の年齢層は下がることが予想され、研修の形式そのものが変更になる可能性もある。毎年の研修に最適なものとなるよう、これからも改訂を続けていくつもりである。

4.　授業実践の概要と特徴

教材の改訂版を用いた「会話上」の授業について報告する。特に、教材の改善点を踏まえながら、教材で提示された活動等が授業の中でどのように実践・応用していったかについて報告する。

「会話上」は2007年8月29日から9月28日の期間に行われた第3期研修の前半2週間

に行われた。研修生は 44 名で 30 代と 40 代の中高の日本語教員である。「会話上」の受講者は 21 名で、10 名と 11 名の 2 クラスに分けた。授業時数は 1 コマ 90 分授業で計 9 回、評価は授業での平常点のみで行った。授業の目標として、1）自分の意見を正確に伝えることができる、2）聞き手を意識した発表ができる、という 2 つを挙げた。授業活動として前述の表 2 の教材構成に応じて、ウォーミングアップの 3 分間トーク･発音練習を行い、主活動のトーク・スピーチ・ディベート・討論を行った。

今回の授業実践において最も重要なのは韓国の中学・高校の教師という学習者の特徴を把握することである。「会話上」の対象である研修生は、自身の日本語力向上のみが目的の自己完結型の学習者ではなく、他の学習者すなわち中高の生徒に日本語を教えるという情報発信型の学習者である。つまり、学習者かつ教授者であるという意味で新たな日本語学習者の創出に関わる者であると言える。したがって、今回の「会話上」の授業では、日本語の会話における運用能力の向上のほかに現代の日本という社会と文化を学ぶ場の提供など、学校教師としての情報受信・発信源という役割を踏まえたものが求められる。トーク・ディベート・ディスカッションという活動をウォーミングアップと主活動に組み込むという授業構成、受講者の特性や社会文化的背景を考慮しながら行ったペア・グループ活動、受講者の質疑応答のきっかけとなる「大福帳」というコミュニケーションカードの使用[2]、という 3 つの実践が効果的だったと考える。以下、実際の授業活動の詳細を報告する。

5. 授業活動

授業活動としては、A. ウォーミングアップ、B. 教材による主活動、C. コミュニケーションカード「大福帳」による質疑応答、の 3 つを行った。さらに、D. 授業外での発音クリニックも希望者のみ行った。授業で行った活動の種類とテーマは以下のとおりである（表 4）。

表 4　授業で行った活動の種類とテーマ（＊は教材と異なる変更点）

	ウォーミングアップ		主活動	
授業	活動	テーマ	活動	テーマ
1	3 分間トーク	研修院の生活について	自己紹介（インタビューと発表）	はじめまして！
2	3 分間トーク	最近とても嬉しかったこと	3 分間スピーチ	最近の出来事
3	発音練習	「かっぱ」（谷川俊太郎）の朗読	くじ引きトーク	身近な話題中心

4	＊５分間トーク	私が一番嫌いなもの	＊ディベート（1）（2）	＊お金より時間の方が大切だ（５・７版）、＊夫より子供の方が大切だ（６・９版）
5	＊５分間トーク	最近とても驚いたこと	＊同上	＊同上
6	＊５分間トーク	大切なものを相手に説明しましょう	＊同上（ディベート本番、教師が審判）	＊同上
7	発音練習	「外郎売り」歌舞伎の科白を真似る	＊討論（1）（2）	韓国社会を考える－継承すべきこと、継承すべきでないこと
8	５分間トーク	＊私の日本体験	＊同上	同上
9	５分間トーク	＊教室での会話の練習方法	＊同上（共同声明文発表）	同上

A．ウォーミングアップ－ペアで３～５分間トーク、発音練習

<u>３分間トーク</u>

教材にあるように実際の活動に入る前に毎回ペアでお互いに自由に話す時間を設けた。今まで当たっていない人とペアになり、ストップウォッチで時間を計って行った。11人編成のクラスでは教師もペアの相手となり参加した。これは実際の活動に入る前の口慣らしとして効果的で、受講者も活発に話していた。

授業での変更点としては、話す時間とテーマの一部変更がある。話す時間に関しては、３分間では一方の人しか話す時間がないとの受講者の指摘から、教材で３分間・４分間と指定してあったものも全部５分間トークに変更し、両者が充分話せるようにした。これはトークのテーマが受講者の興味のあるもので、かつ内容がある程度の時間話す必要のあるものだったことが考えられる。受講者の様子から日本語学習というより話の内容そのものが知りたいことで意見交換のしがいのあるものだということが見られた。

テーマの変更に関しては、１つは授業の主活動であるフリートーク１のテーマ「私の日本体験」をウォーミングアップのトークのテーマにしたことである。これは主活動として必要ないが、お互いの意見交換としては日本語教員としてお互いの日本体験を語り合うのは有意義だと判断したためである。最後のウォーミングアップのトークのテーマ「教室での会話の練習方法」は研修生からの希望で入れたものである。ただし、教師だからといって教育関連の話題だけに興味があるとは限らず、自分が教える生徒が関心を持っている、または持ちそうな現代日本の社会や文化にも興味を持っていた。これは後で述べる「大福帳」というコミュニケーションカードの質問内容にも現れていた。

発音練習

発音練習２回に関しては､発音練習というより発音のリズムを楽しむという点ではよく、受講者も熱心に取り組んでいた。リズムを実感するために手拍子で拍をとらえながら、全体練習とペア練習を組み合わせて行った。ペア練習では、一方が話し手・もう一方が聞き手となって練習し、２人で合唱するなど行った。

問題点としては、教科書の文字だけの情報だと教師の自己流のリズム感覚をそのまま学習者に教えることになってしまうことが挙げられる。発音のモデルとなる音声教材があればより日本語らしいリズムに慣れ親しむことができるだろう。また、教材に取り上げられた題材は個々の音の発音練習･文のイントネーション練習にはあまり適さない題材だった。そこで、発音練習のために授業外で発音クリニックを希望者に個別に行うことにした。

B. 教材による主活動－ペア・グループ・クラス全体での活動

教材の活動内容の取捨選択

ウォーミングアップで行ったトークにおけるテーマの変更だけでなく、主活動の省略も、授業活動における目標の達成度や受講者の学習状況等から判断して、授業では適宜変更した。「会話上」においては､教科書の主活動の後半のフリートーク１と２および討論２をしなくても、教科書の１から６の自己紹介･3 分スピーチ･くじびきトーク･ディベート１回･討論１回で「会話上」の活動が充分達成されたと判断したためである。主な活動の変更としては、教科書の４と５のディベート１とディベート２をまとめた形で１つにして､授業３コマを当てた。また、10 の討論２をやめて、６の討論１のみにして、３コマを当てた。さらに、８のフリートーク１と９のフリートーク２をやめて、フリートーク１のテーマをウォーミングアップの活動に変更した。

ペア・グループの編成上の注意－年齢という要因

10 人と 11 人という比較的少人数クラスの編成の中で、原則としてクラスではどの研修生にもあたるように配慮した。しかし一方で、教材開発でも指摘されたように、社会文化的要因に配慮した授業運営も必要だった。教師であることの職業的要因のほか、年齢という要因が韓国社会では重視され、日本語で会話する場合でも、年齢が１歳上か下かで受講者同士の態度や行動が左右される場面も見られた。

ペアを組む際に、初めからクラス全員に当たることを宣言して、必ず自分が当たっていない受講者とペアになるようにした。宣言することでペアのルールを明確にしてできるだけだれとでも話しやすい環境をつくるよう心がけた。

一方、年齢を尊重する文化圏だということを逆手にとって、討論では年齢が同じ、または最も近い受講者同士で２人または３人グループを組むようにした。これは、韓国社会で継承

すべきこと・継承すべきでないことというテーマから考えついたことで、グループ内を同世代にすることにより世代間の考え方の異同があるかどうかを明らかにする意図もあった。受講者にはある基準でグループ分けしたとだけ言って、活動をしてもらった。2つのクラスのうち、一方は途中で基準に気づく受講者が出たが、もう一方のクラスでは最後まで気づかなかった。どちらのクラスでも討論は各グループで熱心に討論して声明文発表もしていた。このように、年齢を逆手にとるグループ編成も「年齢に配慮した」方法の1つと言えるのではないか。

グループ学習のモニターとしての記録係という第三者の導入

活動内容によってはグループの構成員の役割交替を促す方法として「トライアド・インタビュー」の技法[3]を応用して、3人または4人グループで、Aさんが話し手、Bさんが聞き手、Cさん（4人の場合はDさんも一緒）が記録係になって会話をしてもらった。1回目、2回目、3回目と役割交替して行けば全員が3つの役割で会話ができる。記録係は話し手と聞き手の会話について会話の内容だけでなく話し方など活動に応じたメモもする。この授業では記録係というだけでなく、会話のチェックやアドバイスをしてよりよい会話に改善するためのコメントをしてもらった。例えば、自己紹介のとき、グループ内で聞き手が適切なあいづちをしているか等を記録係が見ておくことである。ペア・グループ活動は自由に話せる半面、自分の話し方をモニターして改善・修正するための気づきに欠ける点があるが、記録係という第三者を置くことで話し手と聞き手の会話を客観的に見られ、このような欠点を補うことができる。

会話をモニターすることについて、「会話上」の教師用マニュアルで教材開発者はビデオ撮影・視聴によるフィードバックを奨励している。しかし、ビデオによるフィードバックを短期研修で行うには、受講者の強い動機付け、機材操作等の効率化などいくつかの条件が必要になる。今回の受講者の大半はビデオによるフィードバックに消極的だった。また、ビデオ機材操作に関しても録音スタジオや大型ビデオカメラなどの機材は研修院にあったものの、フィードバック用として手軽に使える小型ビデオカメラはなかった。さらに、90分授業で全9コマの授業でビデオによるフィードバックをしても、フィードバックの回数や時間を考えると、今回の2週間で9コマの短期集中の会話授業でどの程度の学習効果があるかは未知数であろう。そこで、今回は後で述べるように希望者に15分程度の発音クリニックを授業外で行うことで対応した。

くじ引きトークにおける「アンゲーム」の活用

くじ引きトークでは3人または2人で1グループになって様々な話題で話せるように、「アンゲーム」[4]を活用した。これはカードに質問が1つ書いてあり、カードを1枚めくって書いてある質問について他のメンバーに話すというものである。アメリカで開発され、

本来はコミュニケーションや相互理解を助けるものとしてカウンセラーなど心理療法に利用されている。授業では日本語版の全年齢版およびティーン版のカードから身近な生活に関するテーマを中心に選び、さらに社会文化的な要因を考慮して使用した。例えば、麻薬等の問題に関するテーマは除いた。

また、身近な生活に関するテーマでひととおり話し終えたグループにはあえて社会的なテーマや抽象的なテーマのカードを渡して話すようにした。後で感想を聞くと、内容が難しく、またどう表現したらよいかも難しかったとのことである。しかし、話す様子を見ると、学習者にとって難解そうなテーマでも自分なりの表現で話しているようだった。このように、くじ引きトークは、どんな内容でも知っている表現を使いこなして話してみるという機会を提供するものとして、また表現の幅を広げるという意味でも、会話練習として効果的だと言える。

C. コミュニケーションカード「大福帳」による質疑応答

個々の受講者の会話学習への要望や質問、感想を少しでも的確につかんでそれに応えるために、「大福帳」というコミュニケーションカードを毎回授業終了時、または授業後の休み時間に書いてもらった。提出されたカードには毎回教師のコメントを書いて必ず次の授業に返すようにした。「大福帳」はコニュニケーションツールの一種で、本来は受講者数の多い大規模の授業において学習者・教師間の交流を図るために、受講者の質問やコメントなどを自由に記入するものである（資料 1）。今回の授業では受講者の質問に対する教師の説明の時間を毎回 20 分前後設けた。これは受講者から会話練習の時間が少なくなったとしても質問に対する説明はクラス全体でしてほしいとの要望があったためである。「会話上」の授業内容に直接関係ない質問でもできるだけわかる範囲で説明しようと心がけた。

今回、大人数クラスではなく少人数クラス（1 クラス 10 ～ 11 人）で使用したのは、教師の会話の技能の向上が研修目的であるとはいえ、受講者が日本語教師であるということで単に日本語力向上以外の要望があるのではないかと考えたためである。そのような要望を的確につかんで授業で応えられることには対処していきたいと思ったからである。なお、「大福帳」は日本語でやりとりしたが、これは「会話上」の受講者が日本語で読む・書く技能においてもこのようなやりとりができるだけの日本語力があったからである。日本語力が足りない学習者の場合は意思疎通のために母語を使用するなど媒介言語が必要になると考えられる。

質問内容については、大まかに、現代日本の社会および文化的なこと、文法や会話などの日本語運用のための知識、の 2 つに分けられた。特に、日本と韓国の社会現象の比較、中でも日本の学校教育への関心がうかがわれる質問が多かった。

「会話上」の授業で研修生に接してわかったのは、教師という職業からくる要因がこの教員研修にとって非常に重要だということである。研修生は中高では第二外国語科目として日

本語を教えており、日本語教師として勤務校の生徒に何をどのように教えるか、どうすれば生徒に日本語に興味を持たせることができるかなど考えながら教壇に立っている人々である。日本から来た研修講師に直接質問をすることで、マスメディアやインターネットなどでは手に入らない情報や知識を得たいという熱心な要望が「大福帳」の質問から見えてきた。

D. 授業外での発音クリニック

発音クリニックは授業外で希望者のみ18名に個別で実施し、1人15分程度行った。教科書の中の文章を読んでもらい、評価紙（巻末の資料2参照）に記入しながら発音のくせを発見し改善の方法を指摘し、練習するという方法をとった。発音クリニックを実施した目的は、個人の発音のくせを発見して学習者の気づきを促して正しい発音の仕方を教えること、および、授業以外で個人的に質問やコメント等も聞ける場というオフィスアワーとしての時間を設けることである。発音の改善までは至らなかったが、韓国語母語話者にしばしば見られる清音・濁音の区別のあいまいさ、イントネーションのくせなどに気づくことはある程度できたようである。オフィスアワーとしてはあまり活用されなかったが、これは「大福帳」というコミュニケーションカードが代わりの役を果たしたと考えられる。

6. まとめ

最後に、「会話上」教材の改善点と授業実践結果を表5にまとめる。

表5　平成19年度「会話上」教材の改善点と授業実践結果

平成18年度教材・授業実践から見た改善点	平成19年度教材の具体的な改善点	平成19年度の授業実践結果
1．分量の適切さ	1）授業での取捨選択がしやすいように各課を独立・完結化させてモジュラー形式にする	○課ごと、さらには課の中のウォーミングアップの活動と、主な活動の「トーク」「ディベート」「討論」を学習達成度や進度に応じて一部を他の課に移動したり削除したりできた。 ○「ディベート」と「討論」では、複数の課にあった同じ活動を1つにまとめておこなうことで受講者の学習状況に応じた取捨選択ができた。

2．教師用マニュアルの作成	1）～7）の趣旨を説明する	○クラス分けの基準やテーマ選択など、文化圏や受講者に特有のものへの配慮がしやすく、結果としてクラス運営の円滑化に役立った。
3．討論、ディベートのテーマ選択	3）・6）受講者の特徴を考慮してチーム分けやテーマ選択を行う。特に教員という受講者の特性や韓国の年齢尊重という文化的背景に配慮する。	○同上。 ○テーマに選択肢があったおかげで、テーマ選択については選択肢の中から受講者に選んでもらって決めることができた。
4．発表会	4）発表会と準備の４コマ分を削除、授業の一環としての発表として授業活動へ組み込む。 5）日本語の会話自体を楽しめるようフリートークを増やす。 7）討論で共同声明文を書くようにする。	○授業の一環としてやっても十分学習効果はあった。 ×「ディベート」「討論」は２課分しなくてもよかった。 ○主活動としてのフリートークはしなかった。代わりにウォーミングアップとして３分間トークをした。毎回話す時間が足りないほど盛り上がり、日本語で話す機会を提供できた。 ○共同声明文作成という目標のおかげで討論が活性化され、トークから考えをまとめる目的で話すという議論に発展させるきっかけとなった。
5．発音	2）３課・７課のウォーミングアップに発音練習を組み込む。	○日本語のリズムを楽しみながら声を出す練習になった。 ×受講者が発音の問題点に気づき、それを修正していく練習にはなっていなかった。

（1．2．･･･、1）2）･･･などの番号は「2.1　教材改定のねらい」に箇条書きで挙げられた項目に対応する。○は改善してよかった点、×は問題点を示す。）

以上、「会話上」の教材開発と改定、授業実践について報告してきた。今回の教材開発および授業実践から見て、前年度の問題点はほぼ改善されたと言える。今後の課題としては、各２課分あった「ディベート」「討論」の必要性を検討すること、個人の発音の問題点の気づきと練習を組み込むような発音練習を教材に入れること、という２つが考えられる。

このような教員研修に限らず、教材開発と授業実践との連携で重要なのは可変性と柔軟性ではないかと考える。教材と授業は、同一の一貫した学習目標という点では変わらないものである一方、受講者・学習環境等に応じて変えることができるものでなくてはならないということである。今回の教員研修の「会話上」の授業は可変性・柔軟性のある教材の

開発、および授業の実践のあり方を考えるための一つの例となるだろう。

注

1. 平成18年度「会話上」教材開発は、小野寺・杉浦（2007）に詳しい。
2. コミュニケーションカードの「大福帳」については向後千春（2006）および向後・高橋（2005）を参照した。もともとは100人以上の受講者のいる大規模の授業において、受講者と教師との意思疎通を図るために使用されたものである。
3. 「トライアド・インタビュー」については以下のものを参照した。
   向後千春「Tips　Triad　-　トライアド・インタビューの作法」
   http://kogolab.jp/cgi/yukiwiki/wiki.cgi?TipsTriad　参照日2007年12月4日
4. 「アンゲーム（UNGAME）」とは、アメリカで開発され、自己表現のゲームとして、カードに用意された質問に答えていくものである。ゲームを通じて参加者のコミュニケーションや相互理解を助ける。カウンセリングなど心理療法に利用されている。授業では日本語版の全年齢版およびティーン版を使用した。

参考文献

小野寺志津・杉浦千里（2007）「現職日本語教師研修のための新規上級会話教材開発と実践報告」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』22号：71-80

向後千春（2006）「大福帳は授業の何を変えたか」『日本教育工学会研究報告集』JSET06-5：23-30

向後千春・高橋直樹（2005）「大規模授業での『大福帳』記入に対する返事の要望」『日本教育心理学会第47回総会発表論文集』400

資料１　授業で使用した「大福帳」コミュニケーションカード

2007年　京機道研修　　大福帳 コミュニケーション・カード

講師：	科目名：	
班：	名前： フリガナ：	E-mail:

月／日（曜日）	言いたいこと。聞きたいこと。あなたからの伝言板。	あなたへの伝言板
1 ／（　）		
2 ／（　）		
3 ／（　）		
4 ／（　）		
5 ／（　）		
6 ／（　）		
7 ／（　）		
8 ／（　）		
9 ／（　）		

資料２　発音クリニックの評価紙

○コメント　　名前（　　）

1. 流暢さ　　A　B　C　D
2. 発音とイントネーション　　A　B　C　D
3. 正確さ（語彙・文法など）　　A　B　C　D
4. 話し方　　A　B　C　D
5. 総合　　A　B　C　D

（A:　とてもいい　　B:　いい　　C:　ふつう　　D:　よくない）

コメント：